

黒一点の女子会

中村 龍介

十年以上も前のこと、会社を定年退職したとき、毎日が日曜日になってはいけないと、定期的なアクティビティを求めて近くのカルチャーセンターやジムを物色した。特に身体を動かすことに重点を置いた。

サラリーマン生活では、毎日片道一時間の電車通勤が適当な運動になっていた。会社に行かなくなると、身体を動かす機会がなくなる。生来が怠け者なので自分から運動をするのは苦手である。何か強制力の働く方法として、お金をかければその気になるのではないかと考えた。それも、ゴルフ練習場のように、毎回、払うのでは面白くない。ある程度まとまった金額を前払いしておけば、怠けると『損』になるので、そのことが強制力になるはずだと判断した。

家から徒歩七分、東急の雪谷大塚駅に「東急BE教室」というのがある。スポーツから文化活動までたくさんのプログラムがあつて、三ヶ月の前払いをして会員になる。「六十歳からの健康体操」と「文章教室」の両方にエントリーした。健康と健脳への投資と考えた。

体操教室には十人ほどの生徒がいたが全員女性だった。文字通り六十歳を過ぎている筈だから全員が熟女である。先生は長女と同年くらいのエアロビのインストラクターだ。底抜けに明るいお嬢さんで、体操の指導をする間ものべつ何かお喋りをして生徒たちを笑わせる。我々は彼女のことをその名前から「シゲちゃん先生」と呼ぶ。

黒一点の私は、ある意味で貴重な存在なのだろう、熟女たちに可愛がられて、知らず知らずの間に教室の級長に祭り上げられた。

入会して四年が経った頃、家庭の都合で雪谷から下丸子に転居することになった。今までのように歩いて通うことは出来ない。下丸子にも同じ東急の「オアシス」というジムがある。だが、私は折角仲良しになったメンバーに惹かれて、毎回、雪谷まで車で通うことにした。

その間に、生徒の入れ替わりもあつたが、不思議なことに六名は長期固定メンバーとして残った。この六名にシゲちゃん先生を加えた七人が女子会と称して月に一度、教室の隣にあるファミレスでお喋りをする。

入会してから十二年、殆んど休むことなく毎週木曜日にみんなと顔を合わせてきたが、今年四月、体調が悪化して長い休みを取ることになった。

皆さんから色々とお見舞いの言葉を頂戴した。私も体操が出来ないだけでお喋りなら何の支障もない。

休みが四カ月ほど続いた、八月十五日の夜、我が家で女子会を開くことを

提案した。この日は、多摩川の花火大会でもある。私が八年前妻に先立たれ、今は次女と二人暮らしというのを知っている女子会メンバーは「行きたい！」と衆議一決。

下丸子の我が家は、多摩川沿いに建てられた高層マンションのひとつで、七階にあるため、ベランダからの眺望は素晴らしい。毎年、終戦記念日に開催される大田区主催の多摩川花火大会も、ベランダに椅子を並べると正に特等席となる。

七時前になると、眼下の河川敷にゾロゾロと人が集まって来る。草の上にレジャーシートを敷き、その上に座って見物だ。毎年八月十五日のこの時間、河川敷は大惨事から逃れてきた避難場所のようになる。

玄関のチャイムが鳴り、女子会のメンバーもやってきた。こちらは、リビングのテーブルに、フルーツ、おつまみ、ペットボトルのお茶などを並べて思い思いの席に座ってもらう。夕食は済ませてくるということだったので、何も用意しなかったが、大丈夫かな？

「この家にはネコが二匹居てね。ゴン太はもう直ぐ出てくると思うよ。けど、もう一匹のラーは臆病だからどっかに隠れてるんだよ」

二度目の来訪となるシゲちゃん先生が、キャビネットの洋食器や壁に架けられた絵皿の品定めに余念のない他のメンバーに説明する。

ネコの話でみんなの注目を集めたシゲちゃん先生が、次の話題に移ろうとした瞬間、大玉の打ち上げ花火が窓の外に上がった。

「あつ、上がった！」

誰かが声を上げた直後に腹に響く轟音！ まるで、それが合図だったかのように全員がベランダに飛び出す。

「すごくキレイ！」

「迫力あるわ」

「最高じゃない」

あちらこちらで歓声が上がる。

時ならぬベランダでの騒ぎに、ゴン太が様子を見に出てきて、皆に挨拶のスリスリをする。来客があると、出てきて営業するのはゴン太。もう一匹のラーは物陰に隠れて、客人が帰るのをじっと待っているのだ。

ところが、この日の客人はラーの期待に反してなかなか帰ろうとはしない。火花が終わっても、元のテーブルに戻って四方山話が始まる。

シゲちゃん先生の持って来たケーキの箱を開け、コーヒーを入れる。私は、既に話の輪から外れて膝の上のゴン太の喉元を撫でながら、時折合いの手を入れる程度に参加している。話に夢中のオバサンたちは、私の存在など気にする様子はなく、どんどん自分たちの話題を展開して行く。年齢的には母娘ほど年の違うシゲちゃん先生は、何と、会話の中心に入って話を盛り上げて



後日、入院中に送られてきた写真。
パワーを頂戴した。左6人が女子会メンバー。

いる。「姦しい」とはこういうのを言うのだろう。

それにしても、時計はもう十一時を回っている。シゲちゃん先生以外は、皆さん一家の主婦の筈だ。明日に向けての準備もあるだろう。

折角の楽しいお喋りに水を差すのは申し訳ないが、そろそろ潮時だ。私はそつと立ちあがり、空になったコーヒーカーップを集めてオープンキッチンの流し台に運ぶ。

「あつ、それは私たちが…」

「えつ、もうこんな時間なの」

あちらこちらから驚きにも似た声が飛び交い、お喋りは突然終局を迎える。キッチンに立った熟女たちは手際よく食器を洗い、八十四歳の長老Sさんは年下の亭主に携帯で迎えを頼んでいる。

「中村さん、ホントごめんね。こんなに長居をするはずじゃなかったのに、つつい楽しくて…」と、シゲちゃん先生。

「こちらでも楽しかったよ。また来て下さいね」

Sさんの御亭主の車が到着。シゲちゃん先生の車と二台に分乗して帰っていった。

フーツと一息ついていると、何処に居たのか、ラーがノソリと現れる。

「にゃー」（「長かったにゃー」）

【二〇一六年十月記、 原稿用紙約八枚、 課題「花（火）」】